

栄一さんは、上村栄次郎さん(40歳没)、ヨキさん(85歳没)の3人姉弟の2番目、1人息子として生まれました。父は東川で初めてトラック(フォード)を使った運送業を経営し、当時は何不自由ない生活で奥さま暮らしだったという母は、「こんな幸せはないと思っていた」と後に回想していたそうです。しかし1941(昭和16)年、栄一さんが5歳の時、父は赤紙で召集され、1945(同20)年に沖繩で戦死。母は父が戦地に行つてからは体を壊し床に伏す日々でしたが、戦死公報が届いた途端、生活を支えるため立ち上がりました。親類のツテを頼って行商の手ほどきを受け、寝食を忘れて働いていたそうです。この年、上村呉服店は古着販売の行商からスタートしたのでした。

栄一さんは高校を卒業後、家業を手伝いました。初めて会った際に「良い印象だった」という民子さんと結婚したのは23歳の時。結婚と同時に消防団員として活動し、その後何十年にもわたって地域に貢献。のちに皇居で叙勲されました。さらに、戦没者遺族会では北海道の代表に並ぶ北海道連合遺族会の副会長として、沖繩の北霊碑(北海道の碑)に名が刻まれました。他にも様々な社会貢献に没頭し、家業は民子さんに任せていたそうで、話の途中で民子さんを見て「よくやってくれ



た」と穏やかに声をかけていました。民子さんは、飛騨野数右衛門さん(94歳没)とヨシエさん(86歳没)の5人姉弟の長女として誕生。1人娘だったので特に祖母から可愛がられ、「人への奉仕」や「人の悪口は言わない」などの生き方を教えられたそうで、今でも祖母に会いたくなる時があるとか。高卒後は和洋裁を約2年習い、20歳で結婚。娘3人と孫7人、ひ孫5人に恵まれました。嫁いだのは上村呉服店開業14年目で、「何も苦労を知らずに育った」という民子さんは、「お姑さんが出かける時には靴を揃える」事から学び、技術ばかりではなく商売人としての作法も仕込まれました。民子さんの言葉の端々からはお姑さんへの尊敬がにじみ出ていました。「栄一さんが北海道の遺族会代表として沖繩の慰霊碑前に立った姿を、お姑さんに一目見せてあげたかった」とその時の思いを語ります。

2014(平成26)年、自宅兼店舗を焼失する憂き目にあいましたが、10か月後には再建し店も再開。「こうしてまた店を開けたのは皆さんのおかげです」と周囲への感謝を何度も口にしていました。「人生色々あったけど、何とか乗り越えてきました」と民子さん。《ピンポン》の音に「はい、いらっしやい」と、今日も民子さんの声の上村呉服店に響きます。

俳句

雨上がる地べたに粘る捨てマスク
嘘泣きも上手になって二才の夏
蝶になる捲れなかったカレンダ―
部活の子等自転車連ね夏の夕
青春の始まり秘めて白いシャツ
星も巡礼たそがれ時のたんぼ野
さくらんぼ星より近く手が届く
ヘアマスクツルアジサイの花の下
リラ冷えやパーキンソン友に米寿生く
初挽ぎのりの字レの字の胡瓜かな
夕の膳夏の野菜のてんこもり
七月や空まで続く丘は紫
真つすぐな背で袖通す麻のシャツ
プチトマト母の笑顔はガラス越し
泣き顔も母に似たひと月涼し

佐々木 りえ
本 田 咲
こばやし 星来
斎 藤 夕 桜
山 内 み ゆ
小 林 ろ ば
八 田 昌 代
石 澤 清 宏
杉 山 ひろのり
横 田 則 子
杉 山 り つ
高 瀬 潤
三 島 智
保 科 な ほ
若 田 郁



東川町ヌタツップ吟社
石澤 ☎ 82-5146